

農林水産大臣賞受賞

「地域ぐるみ」の楽しい農業

いいみゆめ たなだ かい
受賞者 飯見夢むら棚田の会

(兵庫県宍粟市)

■ 地域の沿革と概要

宍粟市は兵庫県中西部に位置し、平成 17 年 4 月に旧宍粟郡の 4 町（旧山崎町・旧一宮町・旧波賀町・旧千種町）が合併して誕生した。

南北に広く、9 割を森林が占め、県下最高峰の氷ノ山ひょうのせんのほか 1,000m を超える山々がそびえ、清流「揖保川いぼがわ」や「赤西溪谷」、日本の滝百選「原不動滝」など、豊かで美しい自然資源や風景が四季折々の風情を織りなしている。北は鳥取県、西は岡山県と接しており、京阪神と中国地方を結ぶ中国自動車道と山陽と山陰を結ぶ国道 29 号が地域内で交差する西播磨内陸の交通の要衝となっている。

第 1 図 位置図



■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

宍粟市波賀町飯見地区は、市北部の山の中腹にあり、東に向いた田は日照時間が長く、山懐の棚田は昼夜の温度差が大きいことから、自然の恵みを活かした米作りが盛んな 45 戸 156 名の小さな集落である。

この棚田での米作りの歴史は古く、播磨風土記に「飯戸いひべの阜おか」にて米を食したと記述があり、飯見地区では約 1,300 年前から米作りが行われてきたと考えられる。地域の人が飯見を「いんび」と呼ぶのは、この「飯戸の阜」に由来している。

第 1 表 地区の概要

事項	内容
地区の規模	集落
組織の性格	地縁的な集団等
人口等	総人口 156人 総世帯数 45戸
農業経営体数 (内訳)	農業経営体数 36経営体 個人経営体数 35経営体 団体経営体数 1経営体 (内、法人経営体数) -
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 180ha 耕地面積 17ha 田 17ha 畑 - 耕地率 9.6% 一経営体当たり耕地面積 0.5ha

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

平地部が少ない飯見地区の先人は、少しでも平坦な場所を開墾し、やがて1,100筆あまりの棚田を形成した。

昭和50年代終わり頃、千枚田での農作業は重労働であり、「このままでは、将来誰も農業を継ぐ人がいなくなるのではないか」との危機感を募らせた。さらに、「離農が進めば村を去る人も出るのではないか」との懸念もあり、農作業の重労働から解放を目指してほ場整備導入について話し合いを開始した。

ほ場の大区画化は、機械化や受委託には有利になる反面、法面や耕作道を作るための減歩面積も大きくなることや換地による所有地の移動などが必要となる。このため、反対意見もあり、事業化に向けての話し合いは難航したが、将来に渡り農業を続けていくためには区画を大きくする必要があるとの結論に至った。なお、合意形成まで約2年の歳月を経ることとなった。

この話し合いを続ける中で、未来志向の意見も出され、将来、守り切れないと思われる条件不利な田は、基盤整備の対象とするのではなく山林に戻すことも合意された。

事業は5年間の工事を経て平成2年に完成した。1,100筆から171筆へと区画整備され大型機械による営農が可能となり生産性が向上した。

しかし、その後時代の経過とともに、米づくりのモチベーション低下(価格とコメづくりの手間のアンバランス、消費者の反応が見えない)、ふるさとの繋がり希薄化(伝統文化への関心低下、農業への関心低下など)、コミュニティ機能の低下(集落内の各組織が個々に活動、世代間交流の減少、農家と非農家の活動分離)などの課題が発生した。

平成17年、米価低迷に喘ぐ中、高齢農業者の「自分たちでコメの値段を決めたい」という発言に若い担い手農業者が賛同し、楽しい農業、担い手が進んで引き継いでくれる農業を目指す「飯見夢むら棚田の会(以下「棚田の会」という。)」を発足した。

(2) むらづくりの推進体制

「棚田の会」は、地域の棚田を守り、担い手を育成し、耕作放棄を発生させないことを念頭に置きつつ、具体の地区課題に対応すべく、楽しい農業(価格を自分たちで決めることが出来る米づくり)、ふるさとのつながり強化(知名度の向上)、コミュニティの深化(地域文化の継承)に向けた取組を目指す組織として農業者を中心に結成された。

また、平成19年、多面的機能支払交付金事業の取組を契機に、農村環境を地域に住む全ての人の責務として守る組織として「飯見農水環境全クラブ」が結成された。「飯見農水環



写真1 圃場整備前後

保全クラブ」と協同で活動することで、「棚田の会」発足時は農業者が主となっていた取組に非農家がそれまで以上に参加し、地域一丸となって活動するようになった。

飯見地区では、このように農業者と非農業者が一体的に地域の多様な団体との連携を深めながら、米づくりに関する各種取組を実施している。

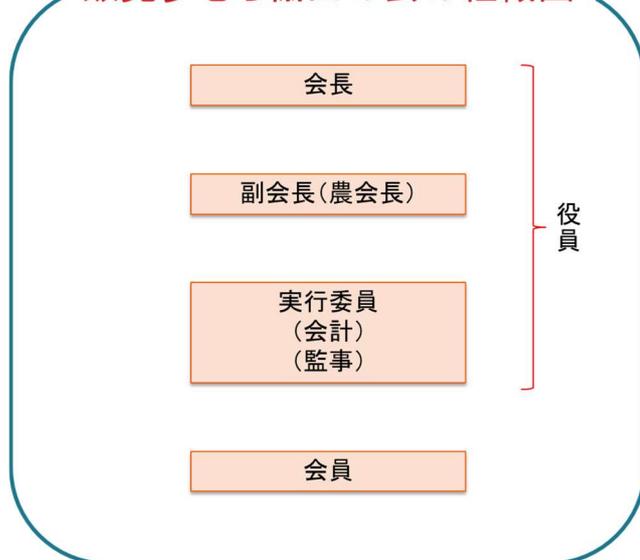
なお、「棚田の会」の役員は、農会のメンバーで構成されており、会長のもと副会長1名、実行委員5名（うち会計1名、監事2名）となっている。

会長は、会員から選挙で選出され、副会長は農会長が兼務している。これに、5隣保（自治会を構成する世帯のうち、隣接する世帯の小単位で構成する下位組織）から選出された各1名と合わせ、役員は7名である。総会は年4回行われ、年間活動は5月の総会で決定されるが、事業計画を確実に実行するための役員会が1か月に1回開催されている。

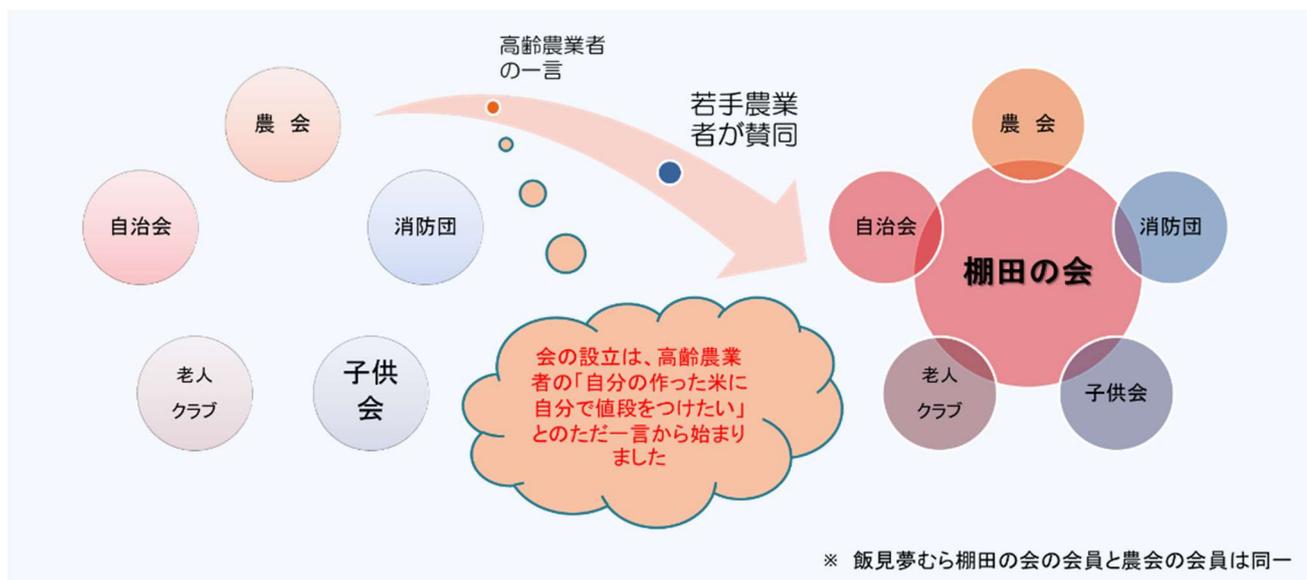
また、事務局は、会員でもある地域おこし協力隊員の協力を得ており、この隊員は、行事の計画原案の作成や手続き、学生グループなど外部団体との連絡調整など、行事の重要な部分を担っている。

第2図 むらづくり推進体制図（概要）

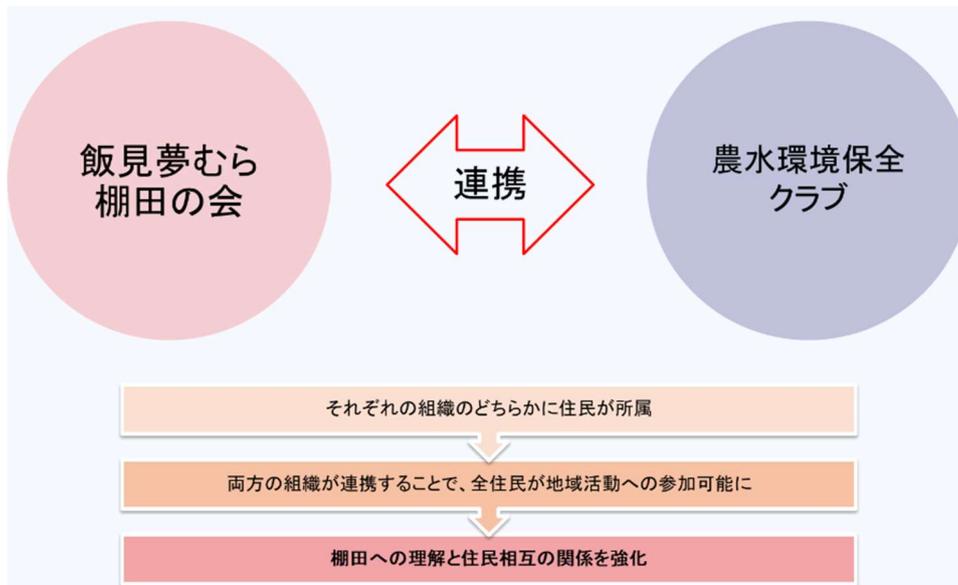
飯見夢むら棚田の会の組織図



第3図 むらづくり推進体制図（設立時）



第4図 むらづくり推進体制図（農水環境保全クラブとの連携）



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

「棚田の会」は、規約に「何より楽しい農業を目指す」ことを明記し、様々なアイデアを出し合って、会員が望む「地域ぐるみ」で取り組む楽しい農業を実践している。

本地区は、農業者が約 80%、非農業者が約 20%であるが、「棚田の会」は、「自治会」、「農会」、「農水環境保全クラブ」、「老人クラブ」、「子ども会」、「消防団」など、非農業者を含む他の組織と密に連携している。

例えば、「棚田の会」が行う「虫おくり」や「新米まつり」（収穫祭）は、「飯見農会」、「飯見自治会」、「飯見農水環境保全クラブ」、「飯見水利委員会」、「飯見老人クラブ」、「飯見子ども会」、「飯見消防団」等の協力を得て開催している。

また、他の組織が主体の行事、例えば、「チャンチャコおどり」や「おたび行列」等の神事、地域の花壇の管理などに「棚田の会」は連携して取り組んでいる。

なお、「棚田の会」の役員は、これら連携団体の会員でもあることから相互関係により地域を守る体制となっている。

2. 農業生産面における特徴

(1) 生産、販売

平成 17 年の「棚田の会」発足後、米価を自分たちで決定したいとの思いから、公募により棚田米の名称を「播州こしひかり飯見の郷」と命名した。平成 26 年には、大学教授など多くの見識者の監修を経てオリジナル米袋を作成した。平成 28 年には、飯見地区独自のライスセンターの整備など、他産地との差別化によるブランド化のための徹底した取組や「道の駅みなみ波賀」での販売、東京中央郵便局等でのサンプル展示



写真2 新米まつり

などによる独自販売ルート確立のための取組、先進地視察による学習活動、棚田ツアーの実施などの取組を行っている。

なお、「棚田の会」が、「道の駅みなみ波賀」で実施する「新米まつり」に出荷された飯見の棚田米は、早々に完売することから、年々、入手が難しい状況になるなど、主軸となる販売ルートは確立されている。

(2) 生産力の向上、生産基盤の整備

棚田米のブランド確立と雉や鴨が共存する棚田を目指し、地域一丸となって環境創造型農業に取り組んでおり、平成28年に安全・安心のブランドの「ひょうご推奨ブランド」認定を取得。令和3年には、さらなる高付加価値化のための取組として、より厳しい基準（化学肥料・農薬の5割以上低減、有機肥料による土づくり、残留農薬が国基準の10%以下）の「ひょうご安心ブランド」認証を取得している。

また、「棚田の会」は、飯見の棚田米の食味検査によるコンテストを実施しており全て「秀」の評価を受ける中、最高得点者には「飯戸の阜」の称号の授与や、単収最高者を表彰するなど、生産者のモチベーションアップ及び生産技術の向上につながる取組と、米袋に生産者の顔写真を貼ることで全員が安全・安心な米づくりを強く意識付けするための取組を導入している。

さらに、ほ場整備完了から30年以上経過し農業用施設も補修が必要な状況となっており、多面的機能支払交付金、中山間直接支払交付金を活用し、農業者・非農業者が協力して地域の農用地、農業用水路等の維持管理を行い、施設の長寿命化を図っている。特に、引原川沿いの棚田は全長5kmにおよぶ飯見水路より農業用水を引いており、集落の皆が協力して維持管理を行っている。

こうした肩肘を張らずに皆で協力し、楽しみながら行う様々な取組が、Uターンや新規就農しやすい雰囲気を作り出しており、担い手が進んで引き継ぐ実態に繋がっている。また、担い手の成長に過度なストレスがなく、取組が継続・発展しており、その結果として山間部の棚田という条件不利地において、耕作放棄地が1筆もない状況となっている。

(3) 経営の改善、女性の活躍

飯見地区は、兼業農家が水稻を個々に生産しており、担い手がない農地は営農組合が耕作している。高齢農業者から若い担い手まで、皆が米づくりに関する様々なアイデアを出し合って農業に取り組んでいる。

また、「棚田の会」の女性部は、「新米まつり」での試食の提供や、新米おにぎりの販売などで活躍しており、山椒みそや山菜の佃煮などのおにぎりに合う一品を添えるなど、ひと手間加えるアイデアで「播州こしひかり飯見の郷」の評判を高めている。



写真3 米の食味検査最高得点者表彰



写真4 女性部のおにぎりづくり

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 景観形成活動

米づくりの原点である水と土を守るため、飯見地区の各組織が一体となって各種取組を実施している。具体的には、農用地や農業用水路等の維持管理だけでなく、農道の草刈、地域内のクリーン作戦、地域の花壇の花植えなどの景観形成活動にも努めている。

令和3年度、これまでの取組が認められて「つなぐ棚田遺産」に選定されたことは、自然環境等を織りなす棚田への、地域住民の理解をさらに深めている。



写真5 棚田の維持管理

(2) コミュニティ活動の強化、都市住民との交流

ア 郷土愛を育む取組

「棚田の会」では、地域の子供たちに雉や鴨が訪れる自然豊かな棚田であることや、環境創造型農業の米作りの大切さを伝えるため平成27年から「棚田の虫おくり」を実施している。この「虫おくり」は毎年7月に地域の子供たちが高低差約200mのあぜ道を、松明を持って約2kmにわたって歩く飯見の夏の風物詩となっている。また、過去に途絶えていた、子供たちが夜明けとともに、田の給水口にお供えをして稲の無病、害虫の無き事、豊作をお祈りする神事で、手を合わせて祈りを捧げる「田の神祭り」という伝統行事を復活させ、引き継いでいる。



(公財) しそ森林王国観光協会 提供

写真6 棚田の虫おくり

この他、他の組織が主体の地域の祭りなどに参画している。旧波賀町の「飯見自治会」を含む周辺5自治会は、災害の退散や豊作を願って奉納される波賀安賀八幡神社の「チャンチャコおどり」への「飯見子ども会」の参加や、神輿の渡御が行われる「おたび行列」の奉納など、室町時代以前から行われている伝統行事に飯見地区の住民も大勢が参加し地域文化を守っている。帰省者を含めて多数の来訪があり、地域住民にとって重要な交流の場となっている。



写真7 おたび行列

また、西から流れる湧水と東に位置する引原川に囲まれた飯見地区は、水を非常に大切にしており、川での安全を願う「川開きの神事」など、水にまつわる神事が文化として根付いている。

これらの取組が、地域住民の棚田の保全意識の向上、米づくりの大切さの理解促進、都市農村交流の場の創出、米のPR・販路開拓、米価の安定に貢献している。

イ 知名度向上の取組

「棚田の会」は、「つなぐ棚田遺産」の認定記念の広報活動として、新潟県魚沼市で米作りに励むタレントの大桃美代子氏による講演会を実施した。この際、「大桃美代子氏がなぜ飯見へ来るの？」と地区内外で大きな反響を呼び、飯見の棚田の知名度が一気に高まった。

また、棚田の水源である湧水を「願いの泉」として祀ったところ、パワースポットとして地区外から人が訪れる密かな人気場所になるなど地域コミュニティの深化にもつながっている。

さらに、里山の自然を知ってもらおうと始めた「カブトムシつかみ」や棚田の中での「鯉つかみ」の行事に都市部から親子連れやカメラマンが訪れるなど都市との交流が行われている。

その他、「播州コシヒカリ飯見の郷」は、令和5年度も宍粟市のふるさと納税返礼品として数量限定で取り扱われているが、高い人気を呼んでおり、地区外居住者と宍粟市を繋ぐ一役を担っている。



写真8 鯉つかみ

(3) 地域への定住促進

景観や自然環境を好まれた6組の方が、飯見地区を二地域居住先として選定しており、クリーン作戦や盆踊りなどの地域の行事に参加している。これには、「来るものは拒まず」という地区特有の風土と棚田保全活動に関わる各組織の取組が大きく寄与していると言える。

また、地域おこし協力隊員が本地区に移住し、鳥獣害対策や狩猟、米づくりを一緒になって行っており、地域の次の時代を担う若手として期待されている。



写真9 飯見の棚田